

公 民 [倫 理] (100 点 50 分)

2013 年 12 月 9 日 (月) 3 限 実施
学年末考査
千葉県立長生高等学校 第 3 学年 ABCD 組
Edited by K.Kataoka

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 解答用紙はマークシート式です。
- 3 受験番号はアルファベットを数字に直し、次の例のように 5 桁で記入してマークを忘れないこと。
例 3 年 D 組 1 番 → 30401
- 4 試験中に解答用紙の不足、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰って復習をするとともに、答案返却の際に持参すること。

倫 理

(解答番号 [1] ~ [50])

第1問 次の文章を読み下の問い(問1~問4)に答えよ。(配点 12)

あるがままの人間性を肯定し、自己の生き方や求めるべき価値を、みずからの理性や感情によって決定する人間尊重の精神は、ルネサンス(文芸復興)に源を発する。ルネサンスとは、本来「再生」を意味し、ギリシャ・ローマの古典文化の復興をめざした文化の改革運動のことである。

その運動は、14世紀に北イタリアの諸都市からはじまった。先駆者であるダンテは、『[1]』をあらわし、人間の罪と苦悩、魂の救済と神の愛を描いた。その後登場した(a)ペトラルカやボッカッチョなどの文学者は、ギリシャ・ローマの古典文化のなかに人間らしい生き方の規範を見だし、文芸作品のなかに(b)ヒューマニズムの精神を表現した。

ルネサンスの精神が大きく開花したのは、美術の世界である。ボッティチェリの作品には、人間の美しさとあふれるばかりの生命の息吹が感じられる。レオナルド＝ダ＝ヴィンチは、絵画・彫刻・建築・土工学・天文学・医学・物理学などのあらゆる分野にわたってその才能を発揮した。ブルクハルトによって[2]とよばれた彼は、人間のもつ無限の可能性を体現し、この時代の理想の人物とされた。

ルネサンス期には、人間の尊厳の自覚や自己認識の深化、その無限の可能性への信頼が、新しい人間観を生み出した。その代表的人物が、イタリアの(c)ピコ＝デッラ＝ミランドラである。ピコは、人間の運命が神によって定められていると思われていた時代に、合理的精神にもとづいた人間の生き方はいかにあるべきかを追究した。

ルネサンスがもたらした人間中心の思想を、イタリアの[3]は政治の領域で展開する。彼の『君主論』によれば、政治は道徳や宗教などにとらわれず、人間社会の現実を熟知してなされなければならない。また、君主は強さとずる賢さを備えるべきで、信義を守り、公明正大に生きる君主よりも、信義など意に介せず、奸策を用い人々から怖れられる君主のほうが大事業をなしとげてきたと主張する。これは、あくまで現実に即して人間を考察した点で、ルネサンスーヒューマニズムの帰結のひとつであるといえる。

問1 文章中の空欄[1]～[3]に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの

①～④のうちから一つずつ選べ。

[1]

① 神曲	② 抒情詩集
③ 最後の晩餐	④ 痴愚神礼讃

[2]

① 遊戯人	② 職業人
③ 万能人	④ 経済人

[3]

① アルベルティ	② ホップズ
③ エラスムス	④ マキャベリ

問2 下線部(a)に関連して、ペトラルカ、ボッカチオ、トマス・モアとその説明アイウの正しい組み合わせを、①～⑥のうちから一つ選べ。[4]

- A ペトラルカ
- B ボッカチオ
- C トマス・モア

ア ラテン文学やダンテの作品に傾倒し、若い頃はナポリの宮廷などにも出入りした。主な作品は、小説『デカメロン』。

イ カトリックの信仰に厚い近代的な人文主義者。エラスムスと交際して人文学を学び、『ユートピア』を書いた。

ウ ローマの古典を研究した人文主義者『カンツォニエーレ』では永遠の恋人ラウラへの愛を、言葉の持つ美しい音楽的響きを生かした格調で歌った。

- ① A－ア B－イ C－ウ ② A－ア B－ウ C－イ
- ③ A－イ B－ア C－ウ ④ A－イ B－ウ C－ア
- ⑤ A－ウ B－ア C－イ ⑥ A－ウ B－イ C－ア

問3 下線部(b)に関して、ヒューマニズムについての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[5]

- ① 12世紀、十字軍によってヨーロッパの勢力がレバントへ拡大したが、文化的には逆に優れたイスラム文化およびその地に保存されていた古代ギリシア文化がヨーロッパに大きな影響を与えた。
- ② 14世紀のイタリアに開花した人間肯定の知的運動で、古代の再発見と結びついて、中世的精神形態からの脱皮を目ざし、地上的人間の活動と人格とを評価し直すことによって、新しい時代の文化・思想を方向づけた。
- ③ 16世紀前半、ヨーロッパのキリスト教、それもローマ・カトリックの教界内部でおこった神学、教義、典礼、教会体制の全般にわたる変革運動で、近代ヨーロッパ世界の形成にとって、重要な意義をもつこととなった。
- ④ ポルトガル語の「歪んだ形の真珠」に由来する語であり、元来は18世紀後半のフランス古典主義の立場から、16世紀後半から18世紀初めまでのバランスを欠くまでに動的な芸術表現に対する蔑称として用いられた。

問4 下線部(c)に関して、ピコ＝デッラ＝ミランドラの思想についての記述として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[6]

- ① 人間の善なる行為は、神の恩寵によってはじめて可能になり、人間の自由意志は悪を行うことしかできない。
- ② 神は人間を世界の中心にすえ、「天上的でも地上的でもない存在、可死的でも不可死的でもない存在」として創造した。
- ③ 神のごときものとなるか、あるいは「墮落して下等な被造物である禽獣」となるかは人間自身の意志により決まる。
- ④ 自由意志こそが人間としての真の生き方を定めるのであると主張し、ここに自然界のほかの動物とは異なる人間の尊厳の優越性を認める。

第2問 次の文章を読み、下の問い（問1～問3）に答えよ。（配点 12）

『[7]』のなかで、ルターは本来の信仰と救済について述べている。ルターによれば、罪からの救いは教会の説く善行にあるのではなく、神への信仰のみにある。この考え方を [8] という。信仰のよりどころは、教会の儀式や慈善事業にではなく、聖書のみにある。したがって、信仰をもち聖書をよりどころとするかぎりにおいて、人は神と直接に対面することができ、すべての信仰者は司祭となる。また、世俗的な職業も司祭と同様に尊ぶべきものであり、神の神聖な定めである。

さらにルターは、それまで司祭や一部の階層だけが読むことのできた聖書をドイツ語に訳して、だれにでも読めるようにした。彼のこのような考え方や実践は、教会や司祭によって人は救済にあずかるという中世的な宗教観を根底からくつがえすものであった。

カルヴァンによれば、(a) 罪からの救済は、教会の教義や儀式はもとより個人の信仰によるものでもない。では、人はこの世においてどう生きればよいのか。カルヴァンは、『[9]』のなかで次のように述べている。人間の社会生活は、神の呼びかけに応じて、それを実践する場であり、神の意志が実現され、神の栄光があらわれる場所である。この社会のなかで、神の呼びかけに応じて、ひたすら勤勉にはたらくことのなかに人間の救いがある。

彼はルターと同様、職業を神からの召命（天職の意）とし、定められた職業にはげむことによって得られる富は正当であり、神聖なものであるとした。この思想はカルヴィニズムとよばれ、とくにイギリス、フランス、オランダなど、西ヨーロッパにおける新興市民層の精神的なささえとなった。彼らはカルヴィニズムを、個人の平等と自由な営利活動の思想的なよりどころとし、(b) 資本主義の担い手として成長していった。

問1 文章中の空欄 [7] ～ [9] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

- | | | | |
|-----|---|-----------|-------------|
| [7] | [| ① キリスト教綱要 | ② 人間の尊厳について |
| | | ③ 神学大全 | ④ キリスト者の自由 |
| [8] | [| ① 信仰義認説 | ② 予定説 |
| | | ③ 王権神授説 | ④ 反仮体説 |
| [9] | [| ① キリスト教綱要 | ② 人間の尊厳について |
| | | ③ 神学大全 | ④ キリスト者の自由 |

問2 下線部(a)に関して、カルヴァンの考える救済のあり方の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[10]

- ① 救済は神の律法を守るものだけに与えられるものであり、律法を守る事のできない罪人は救済から排除される。
- ② 救済は神の恩寵によって与えられるものであると同時に、自由意志による善行が必要不可欠である。
- ③ 救済は神を信じる者すべてに与えられる特権であり、神を信じない者には永遠の滅亡が待っている。
- ④ 救済はすべて、神の意志によって定められているのであり、ある者には永遠の生命が、ある者には永遠の滅亡が予定されている。

問3 下線部(b)に関して、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の著者を、次の①～④のうちから一つ選べ。[11]

- ① マルクス ② モース ③ デュルケム ④ ウェーバー

第3問 次の文章を読み、下の問い（問1～問4）に答えよ。（配点 12）

ルネサンスや宗教改革の運動によって生まれた人間性尊重の精神が、自然をその考察の対象にすえたとき、教会や宗教的権威にしばられず、自然現象を現実に即してあるがままに考察するという考え方が生まれた。ここに近代科学が成立する。

その動きは天文学からはじまった。中世では、地球は宇宙の中心であり、宇宙は神が創造した有限な全体であると考えられ、[12] に代表される天動説が一般的であった。それに対し、ポーランドの天文学者コペルニクスは地動説を唱え、(a) イタリアのガリレイらがそれを継承して、衛星の発見や惑星の運行の研究に成果をあげた。

コペルニクスのあとを受けたイタリアの哲学者 [13] は、「神も宇宙も無限である。無限のものが二つあるのはあり得ないことであるから神は宇宙である。この宇宙には無数の太陽がある。宇宙にはわが太陽系のような世界が無数に存在する」と主張した。この主張を撤回しなかった彼は、教会によって火刑に処せられた。

こうした先人の功績を受けて、ニュートンは著作『[14]』で、「万有引力の法則」を発表し、近代科学の成立に大きな役割をはたした。彼らは自然界のすべての事象を具体的な事実に即して考え、確実に知識を積みあげることがを重視し、事実のなかに数量的な法則性を見いだした。人間は、この認識によって、自然から独立した存在としての自信をもち、新たに征服し利用する対象として、自然に対し目を向けるようになった。

「人間とは何か」「人間としての尊厳の根拠はどこにあるのか」という問いは、時代や地域を超えた普遍的なものである。この問いをめぐってさまざまな見地から思索をめぐらせたのが、16～17世紀に活躍した(b) モラリストとよばれる人々である。

そもそも、モラルとは習俗や規範を意味するラテン語のモレスを語源とし、モラリストとは、人間と社会について観察し、その真のあり方を探究した思想家をいう。彼らは、ギリシヤ・ローマの古典的教養とキリスト教の精神にもとづき、時代とそこに生きる人々の行動や心理を見つめ、人間としてのあるべき姿を求めて、卓越した人間観察をつづけた。

問1 文章中の空欄 [12] ～ [14] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

- [12] [① ガレノス ② プロティノス
 [③ プトレマイオス ④ プロタゴラス

- [13] [① ブルーノ ② クザーヌス
 [③ ウィクリフ ④ アンセルムス

- [14] [① 自然哲学の数学的原理 ② 星界の報告
 [③ 天球の回転について ④ 無限、宇宙および諸世界について

問2 下線部(a)に関して、ガリレイについての記述として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[15]

- ① オランダで望遠鏡が発明されたことを知り、自ら屈折望遠鏡を製作してこれを天体に向けた。そして月が完全な球でなく凹凸があることを発見し、翌年には木星の4個の衛星、太陽の黒点を発見した。
- ② 真空中での落下距離が落下時間の2乗に比例し、しかもそのためには落下速度が落下時間に比例しなければならないという落体の基本法則を発見した。
- ③ 地動説的な宇宙論を全面的に展開した『天文対話』を発表したが、それは時の教皇ウルバヌス8世の忌諱に触れ、翌年彼は異端審問所から断罪され、地動説を誓絶させられた。
- ④ 惑星は太陽を一焦点とする楕円軌道を描くという第1法則、軌道上の惑星の運行速度を定める第2法則、そして諸惑星の太陽からの距離と公転周期の関係を述べた第3法則を発見した。

問3 下線部(b)に関して、モンテーニュの著作として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[16]

- ① エチカ ② パンセ ③ ハムレット ④ エセー

問4 下線部(b)に関して、パスカルの言葉として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[17]

- ① 人間は自然のうちで最も弱い一茎の葦にすぎない。しかしそれは考える葦である。
- ② 生きることの有益さは、その長さにあるのではなく、その用いかたにある。
- ③ わが上なる輝ける星空とわが内なる道徳律に対しては、つねに新しくされる感嘆と尊敬の念とがある。
- ④ 意識が存在を規定するのではなく、存在が意識を規定する。

第4問 次の文章を読み、下の問い（問1～問4）に答えよ。（配点 10）

(a)フランシス・ベーコンによれば、学問はそれ自体が目的ではなく、自然にはたらきかけ、自然を支配し、それを人類の福祉に役立てて人間の生活を豊かにするための手段である。すなわち「[18]」であり、学問により得た知識を用いて支配を増大することが、人間にとって望ましいあり方である。では、どうすれば正しい知識を得ることができるのだろうか。

日常生活において、人間は多くの誤解や錯覚をもって生きている。ベーコンは、このような偏見や思いこみを (b)イドラとよぶ。

これらのイドラを除去したのち、個々の事物や事例に直接当たり、実験や観察を行うことによって、正しい知識が得られる。たとえば、いくつかの物体があるとする。ひとつ目の物体にある作用をおよぼすと、反応があらわれた。二つ目の物体に同じことをすると、最初と同じ反応が出た。三つ目でもその次でも同じ結果であった。そこで私たちは「～という物体は……の性質をもつ」という知識を得ることになる。これは、古代ギリシャ以来のテオリアにもとづく知識の習得とは異なっている。経験によって得た事実を総括し、それによってこれらの事実をつらぬく一般的原理・法則を導き出すこの方法を、[19]という。

ベーコンの学問観や方法論は、現実的・実用的な精神にもとづき、人間の力に対する強い信頼に満ちている。経験論はその後、(c)ホブズ・ロック・バークリー・ヒュームらに継承され、現代に生きつづけている。

問1 文章中の空欄 [18] ～ [19] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

[18]

[① 知は道具	② 知は徳
	③ 知は力	④ 知は偽

[19]

[① 帰納法	② 背理法
	③ 三段論法	④ 演繹法

問2 下線部(a)に関して、ベーコンの著作についての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[20]

- ① 絶対確実な真理を求め、物体と精神が確実に存在することを示した。
- ② スコラ哲学の伝統を乗り越え、新しい信仰と理性の調和のあり方を示した。
- ③ 経験論を徹底させて、客観的な物質世界や自我の実体性を否定した。
- ④ アリストテレスの論理学書に対する新しい学問研究の方法論を示した。

問3 下線部(b)に関して、イドラについての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[21]

- ① 「種族のイドラ」は人間どうしの交わりのなかでことばの不適切な使用から生じる。
- ② 「洞窟のイドラ」は個々の人間が資質や環境に応じて身につけた主観的な偏見である。
- ③ 「市場のイドラ」は権威を無批判に受容することによる偏見である。
- ④ 「劇場のイドラ」は人間が本来もっている精神や感覚の誤りである

問4 下線部(c)に関連して、ロック・バークリー・ヒュームとその思想についての記述、
アイウの正しい組み合わせを、①～⑥のうちから一つ選べ。[22]

- A ロック
- B バークリー
- C ヒューム

- ア 因果関係とは、二対象の接近、継起と恒常的连接に基づき、その必然性は、右の三契機に由来する習慣から生まれた信念に根ざす主観的な「心の決定」の所産にすぎない。
- イ 何ものも「心の外」には、すなわち知覚を離れては存在しないとすれば、もはや「物質的実体」の存在を認める余地はない。
- ウ 経験に由来しない知識（生得原理）は存在せず、心は最初は白紙（タブラ・ラサ）であり、無限に多様な知識も経験に由来する単純観念の複合によって成り立つ。

- | | |
|---------------|---------------|
| ① A－ア B－イ C－ウ | ② A－ア B－ウ C－イ |
| ③ A－イ B－ア C－ウ | ④ A－イ B－ウ C－ア |
| ⑤ A－ウ B－ア C－イ | ⑥ A－ウ B－イ C－ア |

第5問 次の文章を読み、下の問い（問1～問3）に答えよ。（配点 10）

デカルトは、自我とは思考する精神であり、精神とは他に依存することなくそれ自体で存在する実体であるとした。では、思考する精神（理性・自我）により認識される自然や事物は、精神の産物にすぎないのだろうか。デカルトによれば、理性により明らかに存在すると判断されるなら、外的存在も確実に実在する。これらは認識される客体であり、精神とは異なる物体（物質）である。デカルトは、物体もまた精神と同様に実体であり、その属性は空間にその〔23〕をもつことであるとした。

この立場においては、両者はたがいに独立して存在し、関連することも影響し合うこともない。物体は人間の意志や神の意図と切りはなされたものとして、物理的な因果法則のなかで運動する。思考する精神が認識の対象とするかぎり、人間の身体、自己自身の身体すらもたんなる物体にすぎないことになる。このような考え方は、人間の身体や自然現象を、作動する精巧な機械をモデルにしてとらえており、近代科学における〔24〕の先駆をなすものである。

他方、デカルトは人間を心身合一体ととらえ、機械論的には説明できない人間の〔25〕と徳についても論じている。欲望、愛、憎、喜び、悲しみ、驚きなどの〔25〕は、身体から起こるものを精神が受容した状態であり、それによって精神が乱れ行動が束縛される。したがって、徳とは身体と連動した〔25〕を統制することであり、それを可能にしているものが「高邁の精神」である。高邁の精神とは、【A】

理性的思考を行うことに人間の尊厳を認め（理性主義）、人間の無限の可能性を肯定する合理論は、(a)スピノザ・ライプニッツへと受けつがれ、現代にいたるまで大きな影響をおよぼしている。

問1 文章中の空欄〔23〕～〔25〕に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

- | | | | |
|------|---|-----------|-----------|
| [23] | [| ① 延長 | ② 質量 |
| | | ③ 重量 | ④ 思惟 |
| [24] | [| ① 目的論的自然観 | ② 有機体的自然観 |
| | | ③ 数量的自然観 | ④ 機械論的自然観 |
| [25] | [| ① 理性 | ② 意志 |
| | | ③ 感性 | ④ 情念 |

問2 文中の空欄【A】に入る文として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。〔26〕

- ① たとえ全てを疑っている時でも、常識に従うべきであるという仮の道徳である。
- ② 自由意志によって自らの生き方を選択できることが人間の尊厳の根拠である。
- ③ 自らの意志で自律的に生きることこそ人格の尊厳の根拠である。
- ④ 道徳における理性のはたらきであり、自己を尊重する気高い心、自身への誇りである。

問3 文中の下線(a)に関して、スピノザ・ライプニッツの説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。〔27〕

- ① スピノザは『エチカ』で、定義と公理から出発して、神と人間精神の本性を説明した。
- ② スピノザは「神即自然」をユークリッド幾何学の形式にしたがって演繹的に論証した。
- ③ ライプニッツは、モナドとはこれ以上分割できない物体であると考えた。
- ④ ライプニッツは精密に組み立てた二つの時計の比喻によって予定調和を説明した。

第6問 次の文章を読み、下の問い（問1～問2）に答えよ。（配点 10）

ホッブズの考えた社会契約説とは、次のようなものである。彼によれば、人間は生まれながらにして [28] の欲望をもち、その欲望を各自思いのままに追求する自然権をもつ。したがって、自然状態は人間が思いのままに自然権を行使する戦争状態で、人々は欲望を満たすためにたがいに争い、恐怖と不安のなかで生きることになるのである。

そこで各人は、平和と安全を守るために自然権の行使を放棄し、個人または合議体にすべての権利を [29] する。それを [29] された者は統治者として国家を形成し、「リヴァイアサン」のように強大な力をもち、国家の安全と平和を守り、人々は国家の命令に絶対服従する。これがホッブズのいう社会契約である。この契約を守らせるのが理性であり、理性の命令が自然法である。

ロックによれば、人間は本来理性的な存在であり、自然状態は平和である。その状態においては、個人の生命・自由・財産の所有（所有権）という自然権は、理性にもとづく自然法により保障されている。

しかし、自然状態においても財産権をめぐる争いが生じてくるため、自然権を確保するための契約が必要となる。そこで、自然法にもとづいた人為的な法律の支配のもとに、人民は自然権を政府に [30] する。政府の最高機関は議会であって、国家の安全と平和を守り、自然権を保障する。人民は自然権の執行を政府にゆだねるが、政府が人民の権利を保障せず権力を濫用する場合、人民は政府に対する抵抗権・革命権をもつ。

アンシャン- レジーム（旧体制）とよばれるブルボン王朝の絶対王政下で、社会の矛盾や不合理を鋭くつき、人間が本来もっている理性への信頼にもとづいて、封建的因習や専制政治を批判したのが、フランス啓蒙主義の思想運動である。

17～18世紀に展開されたこの思想運動は、封建的・宗教的な権威や習慣、偏見などにとらわれている人間の理性を啓発し、個人の自由・平等を訴え、前近代的な諸制度からの解放を主張した。(a)モンテスキューやヴォルテール、ディドロらはその代表である。

ルソーは『人間不平等起源論』のなかで、社会の腐敗・墮落をきびしく批判する。彼は、この状態を正すには、まず人間が本来どのような状態であったかということに関心を払わねばならないという。彼によれば、人間の自然状態は平和であり、たがいに自由・平等で、思いやり（あわれみ）により自己愛を規制し、信頼に結ばれた理想的なものであった。

それでは、どのような国家のあり方がルソーにとっては理想なのか。彼によれば、人間はだれでも自由と平等を志向する共通の意志をもっている。これを体現するものを [31] という。人々は契約を結ぶときに、[31] にしたがってみずからの自由と権利を国家にゆだねる。契約にもとづき、[31] のもとに成立した国家は、この意志に忠実にしたがって、それを実現しなければならない。国家の主権は人民に属し、政府や統治者は公僕である。

[31] にしたがうかぎり、主権者としての人民は、国家によってその権利を保障されるのである（『社会契約論』）。このようなルソーの思想は、フランス革命の原動力となった。

問1 文章中の空欄 [28] ~ [31] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①~④のうちから一つずつ選べ。

[28] [① 平和生存 ② 自己保存
 ③ 自己実現 ④ 自由競争

[29] [① 譲 渡 ② 信 託
 ③ 保 証 ④ 貸 与

[30] [① 譲 渡 ② 信 託
 ③ 保 証 ④ 貸 与

[31] [① 特殊意志 ② 全体意志
 ③ 一般意志 ④ 自由意志

問2 下線部(a)に関して、モンテスキュー、ヴォルテール、ディドロとその思想についての記述、**アイウ**の正しい組み合わせを、①~⑥のうちから一つ選べ。[32]

- A モンテスキュー
- B ヴォルテール
- C ディドロ

- ア 『百科全書』編集の責任者。刃物師の子として生まれ、パリで哲学・文学・自然科学を学び、文筆活動に入った。無神論者、唯物論者としての思想を形成した。
- イ ボルドーの高等法院の裁判官を務めた法服貴族。ロックの影響を受けて権力分立論を唱えるとともに、著作『ペルシャ人への手紙』でフランス社会を風刺した。
- ウ パリに生まれ、文筆家として活動したが、決闘事件を機にイギリスに渡り、ニュートンやロックの哲学を知り、それらを紹介するとともにフランスのアンシャンレジームを批判する著作『哲学書簡』を著した。

- ① A-ア B-イ C-ウ ② A-ア B-ウ C-イ
- ③ A-イ B-ア C-ウ ④ A-イ B-ウ C-ア
- ⑤ A-ウ B-ア C-イ ⑥ A-ウ B-イ C-ア

第7問 次の文章を読み、下の問い（問1～問4）に答えよ。（配点 14）

カントは『純粋理性批判』などで、経験論が理性のはたらきを過小に評価していることや、合理論が理性の能力を過大に評価する状況を克服するために、理性の能力を吟味するという [33] を唱える。もともと合理論者であったカントは、[34] の著作を読むことで「独断のまどろみ」をやぶ破られたのであった。

カントによれば、私たちが外界の事物を認識するためには、感覚によって対象をとらえなければならぬ。たとえば、「ここに本がある」という認識が成立するためには、何ものかを目で見たり、手で触れたりしなければならない。次に、何ものかが「本」であると認識するためには、「本」という概念がなくてはならない。この場合、本という概念は、本があるという認識に先立っているのである。経験的な認識に先立つものを、カントは [35] なものという。現実の何ものかと「本」という概念により、「ここに本がある」という認識が成り立つ。カントはこのように、感覚を受容する感性と、概念を形成する悟性により、認識が成り立つとした。

カントの思想は、その後、世界の本質を精神におき、現実よりも観念や理想に価値をおくことを特色とするドイツ観念論として発展し、フィヒテ・シェリングらに継承され、(a)ヘーゲルによって大成された。

カントは、(b)道徳法則に自律的にしたがう主体を人格とよび、その人格に最高の価値を認めた。ルソーから多くを学び、人間の尊厳を重視するカントの、この考え方を人格主義という。その人格の本質としてあげられるのが、行為の源泉である意志のよさ、すなわち善意志である。

カントの考え方は、極言すると、その身は奴隷であっても、内面的には自由であり得るというものである。ヘーゲルは、そのような自由は現実的な自由ではないと考える。

『法の哲学』のなかで、ヘーゲルは「[36] 的であるものこそ現実的であり、現実的であるものこそ [36] 的である」と述べる。個人と全体の調和をあくまで理想的な状態として想定するにとどまるカントに対して、ヘーゲルは、個人と全体の自由が実現され得る具体的な場を論ずる。それが (c)人倫である。

問1 文章中の空欄 [33] ～ [36] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

- [33] [① 現実主義哲学 ② 相対的哲学
 [③ 批判哲学 ④ 合理論哲学

- [34] [① ヴォルテール ② ヒューム
 [③ ルソー ④ パスカル

- [35] [① アンチテーゼ ② ア・ポステリオリ
 [③ ア・プリオリ ④ エグジスタンス

- [36] [① 理性 ② 理念
 [③ 知性 ④ 革新

問2 下線部(a)に関して、ヘーゲルの弁証法についての説明として、最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[37]

- ① すべてのものが矛盾・対立を契機として変化・発展していく理性的な運動。
- ② 反・正・合の順番によって構成される運動や変化を記述する論理。
- ③ 生産力と生産関係の矛盾が生産様式の新たな段階への変化を生む。
- ④ 身体を人間と世界、主体と客体とが混ざり合う「両義性」の場としてとらえる。

問3 下線部(b)に関して、カントによる道徳法則についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[38]

- ① あなたがしたがうべき法則は、まずは国法であり、そして神の律法であり、そして道徳法則である。
- ② あなたの人格や他のあらゆる人のうちにある人間性を、いつも同時に目的として扱い、決して単に手段としてのみ扱わないよう行為せよ。
- ③ あなたの意志の格率が、常に同時に普遍的立法の原理に妥当するよう行為せよ。
- ④ あなたの理性の中にある、理法としてのロゴス、つまりは宇宙の秩序としての自然に従え。

問4 下線部(c)に関して、ヘーゲルが「欲望の体系」と批判した人倫の形態として、最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[39]

- ① 国家
- ② 市民社会
- ③ 資本主義
- ④ 家族

第8問 次の文章を読み、下の問い（問1～問3）に答えよ。（配点 10）

(a) ベンサムの影響を受けながらも、異なる人間観から出発したミルは、次のように主張する。人間は、快樂の追求という利己的な一面をもつ一方で、みずからすすんで苦痛を引きうけることもできる。また、快樂には身体的・物質的なものだけではなく、内面的・精神的なものもある。人間が求める快樂には量的に計算できないものもあり、計算することのできない精神的快樂を、より質の高いものとしてミルは尊重する。この立場を質的功利主義という。人間の精神的側面を強調したミルは、制裁についても、[40] という内的制裁を主張した。

プラグマティズムの創始者パースによれば、観念のもつ意味は、その観念にもとづく [41] を通して明らかになり、確かめることができる。すべての観念の源泉は [41] にあり、[41] をギリシャ語でプラグマというところから、彼はこの考え方をプラグマティズムと名づけた。

パースの考え方を発展させたジェームズは、『プラグマティズム』をあらわし、「いかに生活に役立つか」という点から価値の問題を論じている。彼によれば、真偽、善悪、ものの美醜などは、それが人生において有用であるか否かによってその価値が決まる。有用なものこそが真理なのである。さらに彼は、この实用主義とよばれる立場から宗教の価値を論ずる。すなわち、神の存在の有無など観念的な議論は必要でなく、人々に安心や充実感をあたえ、人生を豊かにするものであるなら、宗教は真理である。彼はこのように、实用主義の立場から、科学的な思考と宗教とを調和させようとした。

プラグマティズムを発展させた (b) デューイは、現代社会の諸問題をヨーロッパの伝統的な哲学で解決することは不可能であり、社会の進歩に即応する哲学が必要であると説く。

彼によれば、現代社会では個人の利益ばかりが追求され、人々は利己主義におちいり、社会との結びつきを見失っている。そのため、個人と社会のあいだにさまざまな混乱やゆきづまりが生じている。そこで、デューイは個人と社会との調和をめざし、真の意味での民主主義の理念の確立の必要性を説く。その際、重視されるのが知性の役割である。

知性とは、生活における問題とその状況を把握し、問題の解決に向かって行動を導く能力であり、その行動の結果いかんによって適切であるかどうか判断され、発展していく。知性は真理の探究というはたらきをするだけではなく、問題解決に役立つ創造的知性でなければならない。この考え方を [42] 主義とよぶ。この立場によれば、知性が環境に柔軟に適応し、経験にもとづいて適切な行動へ個人を導くことによって、人間の自由が確立し、進歩がもたらされるのである。

問1 文章中の空欄 [40] ～ [42] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

[40] [① 法律 ② 道徳
 ③ 良心 ④ 自然

[41] [① 効用 ② 実用
 ③ 行為 ④ 結果

[42] [① 動機 ② 功利
 ③ 結果 ④ 道具

問2 下線部(a)に関して、ベンサム思想についての説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[43]

- ① 満足した豚であるよりは不満足な人間であるほうがよく、満足した愚か者であるよりは不満足なソクラテスのほうがよい
- ② 七つの基準（快苦の強さ・持続性・確実性・実現の時期の近さ・多産性・純粹性・範囲）の比較計量である快樂計算によって幸福の測定が行われるとした。
- ③ 幸福とは快樂計算による快樂と苦痛の差し引きの結果であり、この結果を最大のものとするためには、本来利己的な存在である人間には、外からの制裁が必要なのである。
- ④ 重要なのは、結果的に最大の幸福を得る人の数を最大とする行為であり、それを実現する法律がよい法律である。

問3 下線部(b)に関して、デューイの著作として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[44]

- ① 精神現象学
- ② 民主主義と教育
- ③ 種の起源
- ④ 道徳と立法の諸原理序説

第9問 次の文章を読み、下の問い（問1～問4）に答えよ。（配点 12）

産業革命後の都市では、利潤を追求する資本家が台頭する一方、低賃金で過酷な労働に従事する多くの労働者があらわれた。(a)イギリスのオーウェン、フランスのサン - シモン、フーリエらは人道主義的な立場から資本主義をすどく批判し、労働条件や労働者の生活環境の改善を試みたり、差別や搾取のない理想的な共同体の実現を構想した。しかし、彼らの思想は資本主義を科学的に分析する方法に欠けていたため、マルクスや彼の協力者エンゲルスから空想的社会主義者と批判された。

マルクスによれば、(b) もともと人間は労働をその本質とし、仲間と力を合わせてものをつくり出し生活を向上させていくことに、根本的な喜びを見いだすものである。しかし、資本主義社会ではほとんどの生産物は商品となり、労働力までもが商品化されて労働者は雇われてはたらかされる存在となり、創造の喜びや誇りは失われた。しかも労働の成果である生産物は労働者のものとはならず、労働者は生産物から遠ざけられている。

この原因は資本主義の体制そのものにあるのだから、労働者を解放し、その人間性を回復するためには、(c) 革命によって社会制度を根本から改革することが必要である、とマルクスは主張した。

マルクスによれば、資本主義社会では、利潤を目的とする資本家の [45] の私有によって、社会全体で行われるべき生産がそこなわれ、人間は本来の姿から引きはなされている。したがって、[45] を社会全体の共有とする共産制として、革命によってプロレタリア階級（労働者階級）による社会を築くべきである。そこでは階級闘争はなくなり、人間性は回復され、人間は平和のうちに自己のあるべき姿を実現することができる。このように彼は、人間性の回復を社会主義の実現に求めた。

ドイツ社会民主党の指導者であった [46] は、武力による革命を否定し、労働者の代表による議会活動を通して漸進的に社会を改革し、社会主義の理念を実現しようとした。この立場を社会民主主義とよぶ。

イギリスでは、社会主義者の団体であるフェビアン協会が設立された。彼らは功利主義の影響のもと、合法的な議会制度を通して、資本主義の弊害を徐々に改良していく立場をとった。土地や資本の公有化、利潤の公平な再分配や社会保障制度の整備を重視し、国民の倫理的な自覚を高めることで労働者の生活環境も改善され、社会主義の理想が実現されると考えたのである。彼らの考え方はフェビアン主義ともよばれ、イギリス [47] の結成に寄与するとともに、その後の福祉政策にも影響をあたえた。

問1 文章中の空欄 [45] ～ [47] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

- [45]

① 生産様式	② 生産手段
③ 労働力	④ 生産関係

- [46]

① バーナード・ショウ	② ベルンシュタイン
③ ウェブ夫妻	④ レーニン

- [47]

① 労働党	② 保守党
③ チャーティスト運動	④ 軍情報部第6課

問2 下線部(a)に関して、オーウェン、サン・シモン、フーリエとその思想についての記述、アイウの正しい組み合わせを、①～⑥のうちから一つ選べ。[48]

- A オーウェン
- B サン - シモン
- C フーリエ

ア 産業革命の上昇期に、徒弟からイギリス最大の紡績工場支配人となり、スコットランドのニューラナークの紡績工場を経営して生産教育、協同組合などの人道主義的施策を導入し、北アメリカ、インディアナのニューハーモニーにおいて自分の理想とする自給自足、完全平等の協同社会の建設を試みたが、この事業は4年で完全に失敗してしまった。

イ 所有の細分化と商業的寄生とに近代の「産業的無政府性」の原因を帰した。彼は「商業の略奪行為」を告発する。それは、計画破産、買占め、投機、商人の過剰存在のことである。そして、ファランジュという農村的共同体の設立を計画した。

ウ 実証主義を唱え、社会の科学研究としての社会生理学の樹立を企てた。彼の監修による共著『産業』では「すべては産業によって、すべては産業のために」という標語を掲げて、働く人びとの連合としての搾取なき産業体制社会の実現を力説した。さらに『組織者』で現代を「逆立ちした世界」と規定し、その大転換として産業社会の青写真を描いた。

- ① A - ア B - イ C - ウ
- ② A - ア B - ウ C - イ
- ③ A - イ B - ア C - ウ
- ④ A - イ B - ウ C - ア
- ⑤ A - ウ B - ア C - イ
- ⑥ A - ウ B - イ C - ア

問3 下線部(b)に関して、マルクスが言う人間の本質的在り方として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[49]

- ① 経済人
- ② 遊戯人
- ③ 国家的動物
- ④ 類的存在

問4 下線部(c)に関して、唯物史観についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[50]

- ① 世界を動かすのは、精神や理性ではなく人間の生活であり、生きるための生産であり、生産のための人間と人間との関係である。
- ② 生産は、世界精神と生産関係によって成り立つ。世界精神とは、労働手段（石器・青銅器・鉄器・また機械などの道具や生産にかかわる技術）と労働力を用いて、ものをつくり出す能力をいう。
- ③ 法制的・政治的な総体や一定の社会的意識諸形態が、実在的な下部構造としての土台を成し、これのうえに社会の経済的構造生産諸関係の上部構造がそびえたっている。
- ④ 生産力が増大・変化するのに対し、生産関係は社会制度として成立すると固定化する傾向にある。そのため、社会制度と増大していく生産力とのあいだに矛盾が生じる。この矛盾は、具体的には社会契約となってあらわれ、生産力に応じた新しい生産関係がつけられて、新しい社会制度が成立する。